

『全国学力調査：日米比較研究』

● 荒井克弘・倉元直樹 編

(金子書房, 2008年, A5判, 260頁, 4,200円)



● 前川 眞一

(東京工業大学大学院社会理工学研究科教授)

本書は、わが国における教育行政・教育制度・教育測定の第一人者である荒井克弘氏ならびに倉元直樹氏の編集の下に、6名の執筆者が執筆した5部構成、14章から構成されている。本書の狙いは、すでに40年近い歴史をもつ全米学力調査 (NAEP: National Assessment of Educational Progress) と、昨年その復活第1回の実施を迎えたわが国の全国学力調査とを対比し、全国学力調査の問題点を際だたせようということにあると思われるが、その構成から分かるように多くの部分がNAEPの説明に割かれている。しかし、NAEPの技術面に関しては、1989年に東洋経済新報社より出版された統計学辞典にかなり詳しい解説があるものの、わが国においてその実態は必ずしも明らかになっていたとは言い難い。その点、本書の第2~4部は貴重な資料であると言えよう。また、わが国において全国学力調査が再開された現在、本書の出版の意義は大きいと考えられる。

第1部においては、第1章では、学力の評価という観点から、わが国における学力調査ならびにそれと関連の深い大学入試の歴史が概観されている。第2章においては、今回の全国学力調査の導入のきっかけとなった学力低下論争に関してその経緯といくつかの実証的研究が示されている。

第2部においては、第3章では、米国の大学入学者選抜ならびにNAEPの歴史が概観され、第4章では、NAEPの構成、すなわち、各教科の重要事項の網羅的測定を目的とする主調査と、経年変化の測定を可能とする動向調査の内容が、その問題設計や問題作成の手順ならびに実際の問題例を交えて解説されている。また、第5章においては、NAEPの実際の調査の実施主体である調査実施チームの具体的な業務内容 (管理運営、問題作成、印刷、回収等) に関する説明がなされている。

第3部においては、まず第6章で、NAEPで用いられているマトリックス標本抽出法や、結果の集計の際に用いられる項目応答理論 (項目反応理論) による尺度化の方法ならびに結果の公表の際に用いられる推算値等の統計的手法の説明がなされている。また、続く第7~8章では、いわゆる多肢選択肢方式ではない作文や芸術科目の評価法に関しての説明が行われている。また、第9章では学力テストや学力調査の技術革新という観点から、NAEPの特徴が概観されている。

第4部においてはNAEPの結果が読解と作文に関しては第10章に、数学と科学に関しては第11章に述べられているが、尺度得点の属性集団別の傾向や、全米学力調査統括委員会が作成した達成レベルと尺度得点の関係が例題を用いて具体的に説明されている。また、尺度得点の経年変化が示されている。

最後に第5部であるが、第12章においてNAEPの変遷の歴史が、第13章においては、2007年にわが国において出版された日本テスト学会編『テスト・スタンダード——日本のテストの将来に向けて』との関係で全国学力調査の理想型が述べられ、第14章においては今後の全国学力調査への期待が述べられている。

評者は教育測定を専門とするものであるが、わが国においていわゆるテストや試験と称されるものは、たとえば柴山 (2008) が示すように独自の文化をもっており、全国学力調査もまさにその文化の影響下でデザインされたものである。本書における日米比較研究は、まさにそのことを浮き彫りにしていると言えよう。

文献

柴山直「日本のテスト文化について」『人事試験研究』208: 2-13。

『質的調査法を学ぶ人のために』

● 北澤毅・古賀正義 編

(世界思想社, 2008年, 四六判, 278頁, 2,310円)

● 倉石 一郎

(東京外語大学総合国際学研究院准教授)



質的調査の初心者が直面するのが、「データ収集の容易さと分析の困難」というジレンマである。ではこのジレンマ状況を突破するための筋道は、どこにあるのか——。本書は、教育社会学を専門分野とし、質的調査法に惚れ込んだ研究者が集い、上記のような問題設定に応えるべく編まれた論集である。質的調査といってもその幅は広い。しかし類書にありがちな弛緩や妥協とは本書は無縁である。本書は構築主義やエスノメソドロジーといった明確な理論的結集軸をもち、「質的」な発想法を原理的に追求するスタンスが鮮明である。こうした性格が、本書の読後感をさわやかなものにした。

1章「質的調査の四半世紀」(古賀正義)では、社会学ないし教育社会学における理論・学説の展開に相応するかたちで、質的調査をとりまく状況の変貌を浮き彫りにしたものである。2章「質的調査の思考法」(北澤毅)では、質的調査法、とりわけエスノメソドロジーや構築主義の立場に特有のものの見方・考え方のいくつかが表示される。3章「質的調査技法と質的データの特質」では、インタビュー、参与観察、映像データ分析、ドキュメント分析といった代表的な質的調査法について、それぞれ簡潔な説明がなされている。

4章「社会的相互行為の記述について」(清矢良崇)は、社会現象の「形式構造」に着目し、観察し、記述するという問題関心を一貫させることに、どのような実践的意義があるのかという問題を、著者が実際に試みた実習カリキュラムを手がかりに論じている。5章「会話分析とは何か」(阿部耕也)では、会話分析とは特別な態度とテクニックを要する専門家の専有物であるという常識が、小気味よくひっくり返される。著者によれば会話分析とは、日常会話を実践している会話者自身が不可避免的にこなしている課題にほかなら

い。6章「臨床エスノメソドロジーの可能性」(秋葉昌樹)では、保健室における養護教諭と生徒のやり取りのデータ解読において、3秒の「間合い」の意味にこだわることから、教諭と生徒のコミュニケーションが質的变化を遂げるある瞬間をつかむことができた経験が語られている。7章「少年非行の研究法」(北澤毅)では、非行研究に対して構築主義的パースペクティブがなしうる貢献が論じられている。公式統計を実態の反映ととらえる原因論的アプローチ、「氷山の一角」とする暗数論が批判の俎上にのせられ、組織活動の産物として公式統計をとらえるシコレルらの構築主義的アプローチへの賛同が示される。8章「構築主義的なエスノグラフィーを実践する」(古賀正義)では、現代世界においてエスノグラフィーという営みを取りまく諸状況とそれらを克服していく展望が示されている。「ゆるやかな研究関心」の重要性、テキスト構築の重要性、アクティヴ・インタビューの活用、多声的な記述法など、どれも興味深く重要な論点である。9章「言説分析のひとつの方向性」(間山広朗)は、「いじめ」言説を具体的な素材としながらも、言説分析の可能性と射程を原理的に論じきった非常に理論密度の高いもので、「都合の良いデータを切り取っただけ」との、言説分析への通俗的な批判が鮮やかに退けられている。10章では佐藤郁哉氏を、11章では茂呂雄二氏をゲストに招いての、本書執筆陣+ a による鼎談が収録されている。

このように本書は、きわめて盛り沢山な内容でありながらもブレや弛緩がなく、全編にわたって高い理論的緊張感が維持されている。このような好著が、質的調査法に関する著作のラインナップに加わったのはまことに喜ばしいかぎりであり、今後多くの学部・大学院学生によって読まれていくことだろう。